

「アンダーソン病理学カラーアトラス」

PATHOLOGY: A Color Atlas

Ivan Damjanov 著

James Linder

山口 和克

監訳

財団法人癌研究会附属病院副院長

武 藤 徹一郎

時代の要請による学問のはやりすたりはある程度は避け難いものの、昨今の臨床における病理学の影の薄さはどうであろう。こう言うと、病理の専門家は何を言うかと色をなすに違いないが、これは厳然たる事実である。CT, MR その他の画像診断の進歩に加うるに分子生物学の急速な発展のために、病理組織学の占める役割が相対に減少したことは間違いない事実である。しかし、日常診療の場では、病理学の素養が依然として重要であることは言を待たない。疾患の病態把握の基礎となる病理学を知らないで、分子生物学的研究や免疫学的研究を行ってもはじまらないではないか、という気がするのには年のせいだろうか。

われわれの世代の医師にとってはアンダーソンの病理学、アッカーマンの外科病理学といえは病理学のバイブルのようなもので、医師たる者知らぬ人はなかった。アンダーソン

病理学は1996年に160人の執筆者により第10版が出版され、大変な成功を収めた。

これだけ大勢の共同執筆者がいても、統制のとれた記載であるのがアメリカの教科書の優れたところである。本書は第11版改訂へのつなぎとして企画されたアトラス集であり、第10版の各論から選ばれたカラー図版にさらに必要な物を加えた1,500近くのカラー図版に、簡略化した第10版の記載を加えたものである。脳から血管そして眼、耳に至るまでの各臓器について遺伝性疾患を含む先天異常、炎症、腫瘍のマクロ、ミクロの写真が過不足なく網羅されており、説明の文章も簡潔で分かりやすく、大変読みやすい。ページをめくって美しい写真を眺めるだけで時の経つのを忘れてしまうほどである。学部学生、レジデント、実地医家にとって教科書の心髄とも言うべき書物となった、という編者の感

想ももっともと思われる。既に経験を積んだ病理医、臨床医もこの本に接して、時を経て薄れた記憶を新たにしたい、という編者の序文の一節をそのままここで日本の読者にも送りたい。そして、“病理を理解して始めて臨床の腕はあがる”というWilliam Oslerの金言を、本書によって具現化してほしいものである。

このカラー写真と簡潔な記載をみれば、より多くの臨床医が病理に興味を持ち、かつ重要性をより深く理解するようになることは間違いないと思う。翻訳文もよくこなれていて読みやすく、訳者の労を多としたい。

医学生、研修医、レジデントそして経験を積んだ臨床医と病理医にお勧めしたい好著である。

● A4変型 頁504 図・写真1,306
2001 定価(本体12,000円+税)

—メディカル・サイエンス・インターナショナル 刊(☎ 03-5804-6051)